



2003年(平成15年)
10月号(No. 701)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目次

「100周年ニュース」の刊行……	1
100周年記念事業の体制……	2
静岡百名山制定に関する考察…	4
海外の山……	5
報告……	6
総務・ビールパーティー／自然保護・大台ヶ原の登山道・フォーラムIN檜枝岐・尾瀬Climbing & Medicine・	26…
7支部だより……	8
東海・京都・関西／岐阜／越後／北海道／福井／信濃	
東西南北……	12
様変わりするバルトロ街道／第7回ミセス・ウェストン祭／10年ぶり 学生だけのヒマラヤ合宿／山小屋でのトイレ休憩／会員歌、会員章の流れと希望と／アルピニスト山崎直方とビッケル(下)	
さんけん通信……	17
英国エヴェレスト財団助成金・	18
図書紹介……	20
図書受入報告・新入会員……	21
INFORMATION……	22
ルーム日誌……	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

100周年を迎えるにあたって 「100周年ニュース」の刊行

平山 善吉

本会は2005年10月、創立100周年を迎えます。このひとつの節に私たちは何をなすべきなのか、じっくり考えてみたいと思います。本会には各種行事や委員会活動が目白押しです。しかし、100周年事業は、通常の活動、運営にさらなる特別な行動を通して価値観や意義を高めたいという新たな目的が考えられます。その基本的な計画実施にあたっては、全員参加を目標に「全員が参加できる」、あるいは「全員が参加できる」計画を策定したいと思っています。

また、これらの具体的計画については10月末を目処に、目下その詳細の詰めに入っています。私はこの具体的計画について、その準備や経緯を会員の皆様に早く、正しく伝えていくことが大切と考え、会報「山」の1ページを割いて「100周年ニュース」として現状を逐一報告し、また、会員の皆様からのご意見なども聞かせていただき、可能な限りこの計画に反映させたいと思っています。ご意見などお寄せいただければ幸いです。

今、本会をとりまく環境は大きく変化しています。本会は今までは想像することもできなかった規模にまで拡大し、会員の平均年齢は63歳にもなろうとしています。このような時こそ、本会の100年のあゆみを見つめ、100周年の

100周年を迎えるにあたって、今大切なことは、若手会員の皆様の計画への参画と、支部の皆様のご理解、ご指導、ご協力にあると思います。これにより、時代を担う人材の発掘、育成につとめ、本会の長い歴史の流れの中で、継続性、あるいは地域的な広がりを含めた新たなネットワークと協力体制を構築したいと思うのです。それらの推進についてもこの「100周年ニュース」の効果を期待したいところです。

あとに来る本会はどうあるべきなのか、その進路と目標を定めなくてはなりません。会員ひとりひとりの自覚と理解、そして実践の中に100周年のあとの本会の100年が見えてくるような気がいたします。

100周年を成功させるには、多くの会員の英知を結集させることはなりません。このためには、経験豊かな会員の起用、適材適所の人材発掘、そして支部の協力が不可欠です。これに加え、本会にはほかに誇り得る優れた人材がおります。これらの人たちの参画、協力を得るためには、喜んで協力してもらえる体制、環境づくりが必要であり、「100周年ニュース」の刊行により、これらの要望にも応えたいと思っています。

このように「100周年ニュース」が事業計画の策定と周知、そして全会員の情報交換の場として役立つことを願っています。私たちはこの機会に、改めて創立の精

神に学び、100周年を明るく、楽しく、意義深いものとして成功させなくてはなりません。改めて会員の皆様のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

100周年記念事業の体制

藤本 慶光

日本山岳会は2005年10月に創立100周年を迎えるが、それを記念する行事をどのような体制とどのような内容で実施するかについて議論を重ねてきた。

このほど大要が明らかになったので報告したい。10月の理事会で正式に決定し、10月25日の評議員会に諮り、その後の理事会、評議員会、支部長会の合同会議を経て正式に立ちあがる。

創立100周年記念事業委員会

理事会の下で記念事業の推進を総括する。現会長、副会長、会長経験者、副会長経験者の若干名で構成する。(委員長・平山善吉、副委員長・芳賀孝郎、平林克敏、橋本明、委員・山田二郎、村木潤次郎、斎藤淳生、大塚博美、宮下秀樹、小倉茂暉、松田雄一)

□記念事業委員会の下に次の6つの委員会を設ける。

広報委員会 広く会員に100周年記念事業の進捗状況を伝え、全員参加をよびかける。会報『山』に「100周年ニュース」のページを設け、さらにインターネット上でもニュースを流す。(委員長・今村千秋)

募金委員会 100周年記念事業が円滑に実施できるように広く募金をよびかける。会員の皆さんに記念事業の趣旨に賛同いただき毎年30000円、3年間の募金を呼びかけると同時に、一般企業に対しても募金に応じていただけるよう強力に働きかける。(委員長・芳賀孝郎、副委員長・賛田統亜)

財務委員会 記念事業推進にあたり、募金していただいた貴重な財源が各事業の実施にあたって適正

に使われているかを十分に管理して運営する。(委員長 橋本明、副委員長・吉永英明)

長期目標検討委員会 第二世紀目に入る日本山岳会が将来どのような方向に向かって進むべきか、いかなる目標をにかけて活動していくべきかを全国的規模で議論して方向付けを行う。(委員長・田辺寿、副委員長・森武昭)

施設検討委員会 日本山岳会の所有する本部、上高地山岳研究所、図書室を、さらに一層会員の利用に便利ないようにどのように変更、改善していくかを検討する。(委員長・小川武)

行事実行委員会 100周年を記念して実施される行事を有意義なものたらしめるために、各分野にわたる行事の推進を総括し、円滑な実施を実現するための調整を行う。(委員長・平林克敏、副委員長・神崎忠男、藤本慶光)

□行事実行委員会の下に次の5つの委員会を設置する。

記念史刊行委員会 日本山岳会の100年の歴史を後世に伝えるために記念史を刊行する。(委員長・芳賀孝郎)

●百年史刊行——過去長年にわた

って作業してきた100年の歴史をまとめて通史と資料にわけて刊行する。(委員長 松田雄一)

●英文ジャーナル刊行——『ジャパニーズ・アルパイン・ニュース』の100周年記念年号を刊行する。(委員長・中村保)

登山委員会 100周年を記念するにふさわしい登山を国内外で実施する。(委員長・大蔵喜福)

●海外登山——広く海外への登山隊派遣を呼びかけて積極的に支援する。(委員長・大蔵喜福、副委員長・鳥居和雄)

●中央分水嶺踏査——日本中央分水嶺を全国の支部の参加を得て、北海道から九州まで踏査する。(委員長・石田要久)

●海外トレッキング——過去の日本人が世界に残した足跡をたずねるトレッキングを広い地域で実施して全国から参加者を募る。(委員長・黒川恵)

式典委員会 100周年という記念すべき時を長く会員の記憶にとどめる式典を実施する。(委員長・藤本慶光)

●総合式典——全国の会員に広く参加を求め、国内外の関係者を招待して内容の濃い総合式典を20

05年10月15日に東京で実施する。
(委員長・神崎忠男)

●記念映像資料——式典に参加した人々の印象に残る映像資料を会場内に展示する。(委員長・鈴木敬吾)

●記念フォーラム委員会 100周年を記念するさまざまなフォーラムや企画展示を実施する。(委員長・朴元鍾徳)

●フォーラム——各支部で独自に実施されるフォーラムの調整を行うとともに、今後の山岳会のあり方を考えるフォーラムを全国的規模で実施する。(委員長・朴元鍾徳)

●高尾の森——長年実施している高尾の森の記念植樹を引き続き実施すると同時に、自然保護に関するフォーラムを実施する。(委員長・篠崎仁)

●図書展——山岳会が所有する貴重な内外の図書を、東京の「丸善」で、本会の所蔵の絵画とともに展示する。(委員長・田村俊介)

●医療ハンドブック——登山医療に関する小冊子を作成して会員に配布すると同時に一般に販売する医療に関するフォーラムを実施する。(委員長・野口いづみ)

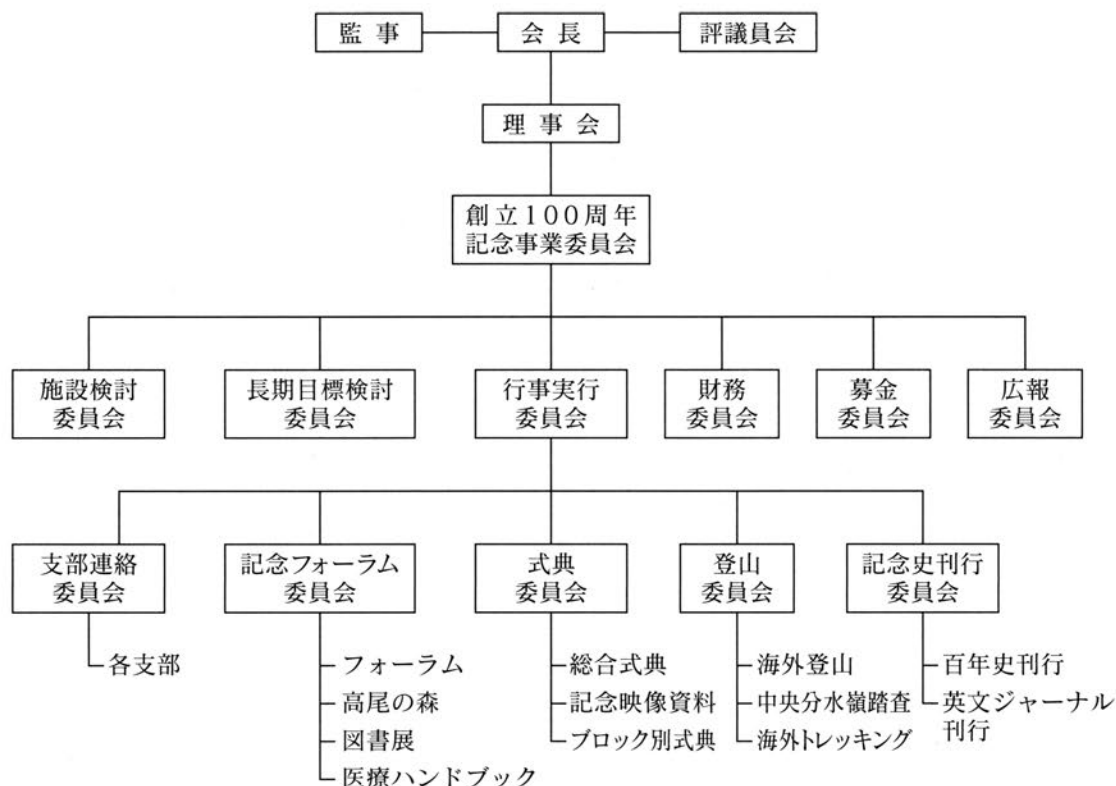
支部連絡委員会

すべての行事に全国の支部からの積極的な参画が強く、のぞまれる。かかる支部への働きかけの調整を行い、円滑な運営を図る連絡委員会を設ける。(委員長・藤本慶光)

以上述べたような各種行事の実施とあわせて、100周年を記念する特別な品物を企画制作して会員に広く頒布する。

本年度より開始した会員の皆さんによる募金については多くの方々にご賛同いただき浄財をお寄せいただいているが、記念行事をさらに充実したものにしていくためにさらに一層のご理解とご協力をいただきたいと切に願います。

100周年記念事業推進組織



百名山ブームのなか 静岡百名山制定に関する考察

■「静岡百名山」を静岡県が指定するかどうかが今議論されている。これは他県の制定にならって我々の県も、ということらしい。

深田久弥氏の『日本百名山』、田中澄江氏の『花の百名山』になら

つてのアイデアであろうが、深田さんも田中さんも自分が歩いて登ってすばらしい感動を名文にしたためたものであって、自分の判断で決められた百である。このようなブームになり、百を目指してこんなに登られようとは夢にも思っていないのではないでしょうか。このままのすばらしさを保ち続けてほしいと願うてのことだったろう。山へのランク付けのさきがけになつてしまうことになるかわかつていたら、『日本百名山』など発刊されなかったかもしれない。生前お会いした限りの感じでは多分そうされたように思う。

山は人類が発生する前から存在し、それぞれ歴史と個性をもつていて、同じ姿をした山はない。そ

して同じ表情もしない。角度や季節が変われば姿も美しさも変え、山は一刻一刻の美しさで我われを魅了する。見る人のその時の心理と合致して、人それぞれに忘れられない思い出の山がでる。

多数の意見を基に選んで国や県が認定するようなことは何の意味があるのだろうか。数を選定するということは、いくつかの目的のために適合するか否かで選ばれるものである。何をもちつて序列をつけるのか。人間の存在以前から鎮座し、人の信仰の対象になつてきた動かしがたい存在の山に、人間ごときが序列をつけてよいものか。

山に言わせれば「思ひ上がるな、人間ども」ということになるだろう。私は世界でも、日本でも県内でも、自分なりの基準の百名山を作つて愛することには何ら異論を唱えるものではない。人が定めた百ではなく、思ひ出を刻みながら自分自身の心の名山を作つてほしい。

(大石 博)

■「静岡百名山」の選定が行政サイドで検討され、知事は乗り気で、百名山完登者には知事認定証の交付も検討したいとのことである。選定の目的は来年度、現在山岳関係者の意見聴取を初めている。

他県で制定された山は山道や道標が整備され、中には伐木をして山頂広場や展望を人工的に拓いたものもある。山頂には標識が建てられ、柱の部分には建てた山岳会名と個人名が並ぶ金属板がはめ込まれている。当然以前からの標識もあり、山頂は標識だらけの無法地帯の様相である。

「山頂だけは安らかに清らかに、そつと残しておきたい。小さな祠ひとつで十分」といったのは深田久弥である。ヒマラヤや本場アルプスには私の登つた範囲だが、山名板などは見た記憶がない。なくとも不都合はないのではないか。

深田百名山は人気の陰りも見せず、近ごろは平日でもこの百名山巡礼ツアーに出くわすのもまれでないと聞く。「人は有名な山にのみ群がる。流行の心理学であろう。私の求めるのは非流行の山である。」「自分の性にあった山をみつける。そこに個性的な山登りがある。そして本当に楽しい充実した登山ができる」ともに深田久弥の言葉である。皮肉にも百名山に群がる登山者への痛烈な批判のように聞こえる。

日本は山岳王国、登る山には一生かけてもこと欠くことはない。それらの山々はひとつとして同じものではなく、各々個性をもっている。また、登る側の登山者も百人百様、好みの山が違つてあたり前である。この千差万様、想像性、選択肢の多いところが山の魅力であり、登山のおもしろさであろう。

個人が好きなき山をあげるのは自由である。しかし行政が先導して決めるとなると押し売りのなり、想像にタガをはめることになる。『日本百名山』のオーバーユースによる自然環境破壊が問題になつている。「静岡百名山」、さらにこのようなローカル版が全国に波及すること、山の過疎、過密の両極化が進み、オーバーユースによる弊害が一段と増長されることになるだろう。一県民として、山を愛するひとりとして、この「静岡百名山」選定の白紙撤回を促したい。

(永野 敏雄)

*静岡支部会報より抜粋しました。

海外の山

ITBP隊、9人全滅

江本 嘉伸



秀麗なパンチ・チュリⅡ峰 (H.カバディア氏「Exploring the Hidden Himalaya」から)

パンチ・チュリは、インド・ウツタランチャル州のアルモラ北東103^{キロ}に位置する、クマオン・ヒマラヤの、5つの鋭峰から成る秀峰である。語源には、インドの文化的背景がある。

古代インドの叙事詩「マハーバーラタ」にバーンダヴァ五兄弟というのが登場する。「パンチ」は、その「五」を意味する言葉で、「チュリ」は、バーンダヴァ五兄

弟が天上に還る最後の食事を準備したカマドのことだそう。

5つの峰から成るが、単にパンチ・チュリ、という場合は、その最高峰の、美しいピラミッド型をした6904^{メートル}のⅡ峰のことを指す。

1929年、イギリスのヒュリー・ラトレッジが山群を偵察、50年にマリーらが東面のソナ谷を偵察、スネルソンらが試登した。52年にはドイツのハインリッヒ・ハーラーとフランク・トーマスが2人のシエルパとともに西側から試登している。

結局、この美しい尖峰に初登頂したのは、1973年、M・シン隊長率いるインド・チベット国境警備隊(ITBP)であった。3000^{メートル}ものロープを使つての困難な登攀だった、という。

それから30年たった2003年夏、ITBP登山隊が再挑戦した。

8月29日、登山活動を開始した同隊は、9月20日朝頂上アタックにはいり、9人全員登頂に成功した。しかし、下山途中の正午過ぎ、雪崩が起き、全員が飛ばされて死亡、ヘリによる捜索で遺体は確認されたという。朗報は、瞬時にし

て、悲報に変わった。

9人の中には、2回登ったサンゲ・シエルパはじめ3人のエヴェレスト登頂者が含まれている。

そのうちのひとり、S・D・シャルマは、1992年のエヴェレスト登頂者で、日本隊とは縁が深い。日本ヒマラヤ協会(HAJ)との合同でカンチェンジュンガに登頂、後年生まれた娘に「カンチェン」と名付けた。他、山形県の隊と合同で初登頂したマナ北西峰隊の隊長を務め、日本に招待されたこともある。

ITBPは、中印国境紛争をきっかけに組織された、ヒマラヤをかかえた国独特の警察隊である。

1950年代から、大ヒマラヤ山系に沿う慣習線を主張する中国に対し、インドはその北方の、イギリス植民地時代に境界線と定められた「マクマホン・ライン」(1914年、イギリス・チベット間で合意。中国は認めていない)を主張、真つ向から対立している。59年には、中国人民解放軍のラサ進駐に反抗するチベット蜂起をきっかけに、国境紛争に発展した。60年、ネール・周恩来会談で平和5原則に基づき解決がはかられた

が、紛争は決着を見ず、62年になつてカシミール地方東部のアクサイチンなどで大規模な戦闘が展開された。

この戦いで痛手を受けたインドは、国境警備の強化を決意する。62年、内務省所管の国境警備隊(BSF)の下部組織として、インド・チベット国境警備隊(ITBP)を発足させたのである。警察といっても、「准軍隊」の位置付けであった。

ITBPの特色は、なんといっても、高地に駐屯する点にある。高所での迅速な行動訓練に登山、スキー、ラフティングなどの「スポーツ」が活用され、その成果はめざましいものがあつた。

ITBPからは、多くの登山家が生まれ、2度エヴェレストに登頂したことで知られる女性登山家サントシユ・ヤダブもそのひとりだ。彼女は92年のサラワステイ日印合同隊のインド側隊長でもあつた。

日本隊を含め、雪崩による悲報が目立つ今年のヒマラヤである。

(8月号の記事で広州―ラサ便の経由地「徳欽」は、「迪慶」に訂正します)

報告

REPORT
9月

総務委員会

少数精鋭

恒例のビールパーティー

9月5日(金)午後7時より恒例のビールパーティーが、日本山岳会ルームで行われた。開催日が金曜日となったこともあって、参加者は43人に留まったが、乾杯の挨拶に立った芳賀副会長が述べたように「今年は少数精鋭が揃った」飲みっぷりだった。日本酒や焼酎も登場し、なごやかなひとときをすごした。

(永田 弘太郎)

自然保護委員会

●大台ヶ原の

登山道について

環境省主催の第2回大台ヶ原周回線歩道整備現地説明会が、8月

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

26日に開催され、関西支部より自然保護委員三氏ならびに自然保護委員会より篠崎が参加した。

日本山岳会と大台ヶ原のかかわりは古い。1977年に織内副会長(当時)はじめ自然保護委員、関西支部委員が白川又林道計画について現地視察を行い「大峰・大台からのアピール」を発表、山岳会長名で奈良県あてに2度にわたって要望書を提出、交渉等の経過を経て、奈良県より林道の短縮、伐採面積の縮小という回答を得ることができた。

8月26日の環境省の説明会は、歩道整備に対する現地説明および意見聴取である。参加者は、環境省、奈良県、設計業者、日本山岳会などであった。ビジターセンターでの簡単な説明のあと、設計図を手にシオカラ谷―大蛇峠―牛石



大台ヶ原現地説明会

ケ原―尾鷲辻の整備予定コースを歩いて率直な意見交換が行われた。細部の工事以前の問題として判明したことは、登山道についての基本的な認識の違いであった。登山者に「登りやすく、快適に、便利に」が環境省および施行者である奈良県の思想であるように窺えた。説明のなかに直接この表現はなかったが、一つ一つの工法にその考え方が現れていた。観光客ではない登山者が山を楽しむためには、整備された階段、はしこ、すのこ、そしてきれいなならされた道は要らないはずである。観光道路整備と同様の発想から抜け出せないようであった。

ないようであった。

説明会の最後に環境省は「取りあえず急を要する部分を着工して、あとの部分は住民等と意見の調整をしつつ、時間が足りない場合は来年度に延ばすこともあり得る」と説明、また奈良県は「今年度は危険防止の施行だけして、歩き易くする整備は来年に延ばす」と説明した。その結果施行箇所は当初案より減ることとなった。

参加者の意見は聞き置いたうえで、工事は強行することをおそれていたが、今回は予想以上の譲歩であった。率直にわれわれの意見に耳を傾けた環境省、奈良県の誠意は評価できる。ただし、今回の説明会には施行業者が参加しておらず、設計者の厳格な施行監督を期待したい。

環境省の基本方針には「歩道利用に伴う植生や浸食への負荷の軽減」とあるが、今回の整備計画はあくまでも対症療法の出ない。登山者による過剰利用(オーバーユース)によって山が荒れ、荒れた登山道を整備することにより登山者が増えさらに荒れるという悪循環を招来する。抜本的対策として、改正自然公園法による利用調

整地区の制度の活用も視野に入れながら、入山規制を進める必要がある。
(篠崎 仁)

●フォーラム―N松枝岐・尾瀬(緑爽会後援)

今年度フォーラムは8月22日(金)24日(日)、武田久吉をテーマに松枝岐村および南会津山の会の後援、協力で開催された。

第1日は松枝岐村ミニ尾瀬公園内にある武田久吉メモリアルホールを見学後、同村東雲館(公民館)で交流集会。博士に捧げるコンサートではオルガン伴奏による「アヴェ・マリア」「庭の千草」などの歌、箏、フルートによる「夢舞」などで故人を偲んだ。

演劇は「山月記」。続くシンポジウムは「メモリアルホール設立について」(元教育長・星廣人氏)、「博士の業績」(国見利夫会員)の後、武田澄江、林静枝姉妹の口から博士の素顔と山の交友が語られた。引出し役は近藤信行会員。その夜、宿舎御池ロッジでは講演「深田久弥と中嶋敦」(高辻謙輔会員)のほか、歌、朗読、マンドリン演奏と続いた。

2日目は会津駒ヶ岳、燧ヶ岳、尾瀬ヶ原縦断、尾瀬沼半周、観光に分かれて行動した。この夏まれな快晴に恵まれ、どのコースも参

加者は大満足だった。その夜、松枝岐の民宿に泊まった駒ヶ岳組は中西章会員の講演を、戸倉のロッジ長蔵では「ジャンソンの夕べ」

を楽しんだ。参加者約150名。後援、協力してくださった団体、個人の方々に心からお礼申し上げます。
(近藤 緑)

Climbing & Medicine · 26

登山と食事 日頃の食事が健康登山の決め手

百々瀬 いづみ

登山では荷物の軽量化が優先されるために、消費エネルギーに見合う十分な栄養素が摂取されていないことが少なくありません。水分量についても、山では口渴感が鈍感になることや飲料水を取り出す時間の節約から、消費・排泄に相応した、適時・適量摂取ができていない場合が多いようです。

水分や糖質、その他必要な栄養素が補給できる食品の携行が望ましいことは、言うまでもありません。しかし、軽量で高エネルギーの食品は、脂肪やたんぱく質が多く、消化機能が低下した山では食べにくいものです。このような点から、ご飯などの穀類や果物は食べやすく、消化面からも好ましい食品と言えます。

また、摂取した糖質や脂質を効率よくエネルギー変換するために、摂取エネルギーに見合う量のビタミンB₁、B₂が必要です。これらが多く含まれる代表的な食

品には豚肉(ハム類)、ナッツ類、みかんなどがあります。糖質や脂質から十分にエネルギーが供給されると、たんぱく質(筋肉)の分解を最小限にし、登山後の体重減少、疲労感を少なくすることができます。

登山後の食事では、疲労物質の乳酸やケトン体を除去するとともに、消費したグリコーゲンと損傷した筋肉を回復させることが重要です。そのためには、できるだけ早いタイミングで、糖質、クエン酸、たんぱく質を補給することが必要です。レモンの水飴漬やレバー、ハム類の薫製などがお勧めです。

また、日頃の食生活に配慮し、欠食や偏食をせず、健康な身体づくりをしておくことも重要です。栄養素不足の身体で登山すると、健康を損なう恐れがあります。日頃の食卓に、毎食ごと主食(穀類)、主菜(たんぱく質食品)、副菜(野菜類)の3つの料理をそろえるように心掛けると、栄養素のバランスが整います。夕食は比較的バランスが良い人でも、朝・昼食は不規則、アンバランスが多いようです。日頃からの心がけが、山でも健康により楽しく過せることにつながるでしょう。

(本稿は第23回日本登山医学会(平成15年5月)のシンポジウム「登山と栄養」で発表されたものの要旨です)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

東海・京都・関西支部

第5回「森の勉強会」報告

第1回「森の勉強会」が平成10年(1998年)に京都府美山町の芦生の森で開催されて、今回で5回目となる。日本山岳会東海・京都・関西支部の自然保護委員会を中心とした取り組みであったが、第2回目の「森の勉強会」から全国の会員へも参加を呼びかけた。

今回(6月14、15日)の「森の勉強会」の開催地は芦生の森から離れて、東海支部の地元である「愛知県民の森」で行われた。愛知県という地理的な意味合いから今回は首都圏からも参加しやすかったのではない。また、日本海側気

候と太平洋側気候の混交する芦生の森とは違い、太平洋側の温帯気候の植生を観るには良い機会となった。東海・京都・関西支部の3支部共催の「森の勉強会」であるが、今回は地元・東海支部会員、会友の皆さんの尽力は大きい。

四季が豊かで、水資源に恵まれた日本は森林資源の豊富な国である。同時に、森林自給率20²¹という、森林資源活用については貧困な国でもある。海外からの輸入木材の多さと比例して、国内の多くの人工林が放置され崩壊していく。「木は山からではなく海から採れる」と揶揄される所以である。スギは真っ直ぐ伸びさせるために密集して植林される。ある程度、伸びると間伐しなければ大きく育たない。ところが、日本のスギやヒノキは、その採算性が取れないために放置されている。人工林は手入れし整備されてこそ人の役に立つ。手入れや整備されない人工林は、その存在自体が自然環境を破壊しているのではない。それならば、人間が手を付けない自然林の方が、はるかに地球環境保護の意味からマシではないか。

多くの遺伝子資源を残すという

意味合いからして、ナラやブナなどに代表される広葉樹の方が、スギやヒノキに代表される人工林よりは遙かに地球環境にはやさしいだろう。芦生の森や、今回の愛知県民の森など、人間が利用できなかった森が残った。それが反面教師として豊かな自然環境を今日の我々に残してくれている。橋村一豊氏の言葉を借りれば、日本の山を特徴づけるキーワードをひとつだけ選べばそれは「森林」であるという。なぜ「森の勉強会」か。森林をキーワードにして、模索しながら、この国の未来への自然保護のあり方を探っている。

第5回「森の勉強会」の参加者は41名とインストラクター3名の総勢44名である。支部内訳は首都圏、東海、京都、関西、広島支部である。もちろん、支部会友や日本山岳会会員外の方も参加している。

1日目は東海支部・橋村一豊氏の各支部紹介とイントロスピーチに始まった。自然保護委員長・河西瑛一郎氏の「高尾の森」を例とする首都圏の自然保護活動の報告があり、東海、京都、関西、広島支部の代表による自然保護の報告

が行われた。

座学は東海支部の石村俊洋氏の「愛知万博と自然保護」についての報告。東海支部の小川務氏の「愛知県山間部地域の環境問題とその対応」についての報告。講演は朝日新聞・森林文化協会の海老沢秀夫氏による「暖温帯と冷温帯の樹木」について行われた。その中で、朝日新聞100周年事業として開設された滋賀県朽木村の森林文化協会の施設が赤字により今年度で閉鎖になると報告がなされた。関西地域では、子どもたちも含めた森林について学びたいと思う多くの人たちが廉価で宿泊できる唯一と言える施設であっただけに残念なことである。さらに講演は川合鋁一氏により「愛知県民の森の自然史」について行われた。

夜は恒例の交流会で、広島支部の「賀茂泉」の蔵主である前垣壽男氏の「本物の日本酒」の話は大人に盛り上がった。

2日目は実習コースでA、B、Cと3班に別れた。Aコースのインストラクターは川合鋁一氏、コースはモリトピア駐車場から鶴橋、石楠花自生地、下石の滝、亀石の滝、鶯の滝、ガクの窪、杉品

種展示林を経てモリトピア駐車場に戻るもので所要時間は約6時間。Bコースのインストラクターは今泉修一氏。コースはAコースの反対を歩行するものである。Cコースのインストラクターは海老沢秀夫氏。コースはABコースの滝まで重複し、下石の滝から谷ルートで西尾根に入り滝尾根を下降するもの。所要時間は約8時間である。それぞれに太平洋沿岸の温帯気候の植生について実地に学んで、散会した。

(伊原 哲士)

岐阜支部

中央アジア、シルクロードの核心部を旅する

日本人拉致事件のおかげで延期され、3年越しでようやく実現したウスベキスタン、キルギス両共和国への探訪の旅は、予想を上回る31名の参加者を得た。名古屋、成田、関西の各空港から出発した一行はソウル空港で合流し、6月27日から7月5日までの9日間にわたってシルクロードの核心部を旅してきた。

27日はソウル経由で夕暮れ迫るウスベキスタンの首都タシケント

に21時過ぎに到着。さっそく翌日には、中国とローマを結ぶシルクロードの歴史的な中心地で、ユーラシア大陸の交流の中心地であったサマルカンドの旧、新市街で、チムールのブルを基調としたモスクの数々や金箔芸術のみことな神学校などを見て回る。行き交う人も多種多様。2500年前に戦禍にまみえたあのアフガンの地があるうとは、想像すらできない穏やかな営みが見られた。

翌日にはいったんタシケントに戻り、アンデジャンを経てキルギス第2の都市オーシに向かう。国境の入り組んだ三角地帯ともいう



31名でシルクロードへ

べき地域だけあって、予想どおり国境の通過に2時間近くを要してしまった。そしてこの日のホテルから初めて目指すパミール高原の山並みを垣間見た。

5日目、6WDの旧軍用車両3台に分乗し、2500m先にあるパミールの懐アチクタシのベースキャンプに向かう。途中4000mのキルギジ峠を越え、さらにアラール海に注ぐ川を縦断して、標高3800m、高山植物が咲き乱れるレーニン峰を見上げるフランス隊のベースキャンプに10時間後の午後7時に到着した。

好天に恵まれた翌朝、ペトロスキー峰(4803m)登頂、ジャンクションピーク(4200m)登山、および探検家の峠トレッキングの3班に分かれ、それぞれが希望のコースで高山の気分を満喫した。

初期の目的を残らず達成して、全員が無事帰途についた。数年間にわたった、中国西安に始まり、ウルムチー、タクラマカン、カシュガル、そしてトルコ縦断など、ひととりのシルクロードの旅をこれで終えることができた。

(藤井 法道)

越後支部

弥彦山松明登山祭50回記念山頂に展望盤設置

日本三大祭りのひとつに数えられる越後一宮弥彦神社の燈籠神事に協賛し、昭和29年弥彦山に伝わる雨乞行事を再現し始まった松明登山祭が、今年第50回を迎え、7月25日に行われた。これを記念し越後支部では、県下一の大観を誇る山頂の聖地に展望盤を設置した。

当日は恒例の第46回高頭祭も行われ、終了後弥彦山頂の展望盤へ移動し、支部会員や一般登山者百

年末年始カトマンズ行特別運行便
成田と福岡から発着・成都合流

予告

成都からチベット上空を飛ぶ

第12回 ヒマラヤ越えフライト

機窓からの大パノラマをこの機会にご堪能下さい。
笑顔のシェルバ達が皆様のお出でを待っています。

●12/27(土)～1/5(月) 10日間 全10コース

国土交通大臣登録旅行業第490号/出日本旅行業協会正会員 日本観光振興会
アルパインツアーズ株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-ts.co.jp http://www.alpine-tour.com

彌彦山



弥彦山頂に設置された展望盤

名余が見守るなか、平田大六支部長、望月力支部名誉会員、室賀輝男前支部長、山崎幸和副支部長、渡辺支部監事らの手で除幕され竣工を祝った。

支部ではかねてより山頂へ展望盤を、の構想を望月氏、室賀氏、渡辺氏らで進めていたが、故五十嵐篤雄元支部長の山岳基金と弥彦神社・大森利憲宮司の設置場所の配慮と表題文字の執筆等で実現を早めた。展望盤の原図は山崎氏の原画を基に小林智明前支部長が鉤金制作、台座の銘文は山崎氏の撰で、制作は望月氏が担当した。このほか趣旨に賛同した支部員の浄財も大きい。今後は訪れる方々に

親しまれ、末永く語り継がれることを期待したい。(横山 征平)

北海道支部

第4回自然児学校の体験から

小学生から中学生まで、今年は32名となり、スタッフも30名で日高山脈のふもと新冠町泉地区で8月7日から10日まで3泊4日間のテント生活の予定であった。台風10号の接近を知り、里平川の河原にテント設営は危険と判断し、泉地区の丘陵地帯にある坂本牧場に16張のテント村が出現。ここで焚火による飯盒炊事から薪割りなど、原始生活に基づく自然児学校を展開した。

1日目は晴天で藤原農園のトマト、ピーマンを4日間の副食材として自分たちで収穫して班ごとのカゴに入れ、向井副支部長の経営する鶏の有精卵を材料にそれぞれのメニューでなごやかなキャンプワークとなった。

2日目の登山活動は里平山から近くの笹山(805・9m)に変更した。出発9時、全員登頂12時、キャンプ地帰着15時と順調であったが、天候は悪化し始め、女生徒

12名の3張のテントを作業舎内に移動する。

3日目のメインスケジュールは地下足袋を着用して渡河訓練であったが、川は濁流となり始め、楽しみの溪流釣りも中止。作業舎内で「植物・岩石・天体」などの講話を講師が交代でやってみたが、大雨が作業舎の屋根にぶつかる音でよく聞こえない。それでも全員に渡したロープで結び方、プルージック法によるシュリンゲとカラビナの操作など、子どもたちは真剣に演習した。坂本幸二氏が昨年も牛舎の片面に作成したクライミング・ウォールで全員にコーチをしてくださったが、毎年参加している生徒数名が今年もクライミングを希望し、全員が一列に並んで1人ずつアップダウンした。

外の雨は激しくなり、男生徒のテント5張も農機具庫内に移設する。その後集中豪雨となり、夜9時頃、スタッフの車4台で近くの若園小学校に避難する。道路にも濁流があふれ、車の前方確認が困難になるほどの豪雨であった。

8月10日の朝は台風が通過し青空となったが、若園小学校のグラウンドは泥沼と化し、校長公宅周

辺には無数の流木が散乱していた。その流木を足も服もドロドロになりながら整理している子どもたちがいた。自然児学校のメンバーであった。私は感動し、一人一人を抱きしめてやりたい気持ちで胸がジーンと熱くなった。こういう子どもたちを神童と呼びたい。若園生活館前の閉会式で、この神童たちは「来年も参加しようね」と握手していた。ぬれた寝袋でも頭痛や腹痛を訴えた子どもはひとりもいなかった。自然の猛威を体験した自然児学校は重厚な年輪を加えた。今回のこととお世話になった各方面の方々に心からお礼申し上げます。来年はこの流木で盛大な焚火をし、貴重な体験と生命の尊さを語り継ぐものになりたいと思っています。(新妻 徹)

福井支部

「三百名山完登」 策ケ岳(2926m)

この計画は、平成3年11月14日、日本山岳会福井支部を設立した際、自然保護、海外登山、日本三百名山登山を事業の三本柱に入れていたので、会員として目標となり、



策ヶ岳に登頂し、日本三百名山完登

また全国会員との交流にもつながった。

日本山岳会では1978年、日本三百名山を選定した。深田久弥の『日本百名山』はそのまま採用し、新たに二百名山を選定した。なお深田クラブの日本二百名山は日本三百名山より後につくられたもので、深田クラブが選定にあたった。私は98年6月15日、百名山を完登した。その後5年間で三百名山に挑戦し、8月16日策ヶ岳に登り念願を果たした。

この日は白霧のなか朝4時、山梨県早川町老平の登山口を出発、6時、予定通り広河原に到着した。しかし先般からの台風や長雨で、

川は泡立つような水勢、水かさも増し、徒渉が困難ではないかと危惧したが江田さんが先に渡り、宮本とふたりがロープで確保し、井上、大和、山本(胸までつかる)、宮本で無事徒渉できた。

この山は02年3月29日計画したが、雪のため通行止めとなり登ることができなかった。6月29、30日樺島から計画したが、バスの運行時間がなくなり、やむなく山伏岳に登る。3回目の挑戦で念願を果たすことができた。

(宮本 数男)

信濃支部

快晴の剣岳、奥大日岳

支部恒例の夏山山行は昨年風雨のため登れなかった剣岳への再チャレンジとなった。8月22日(金)、6時30分扇沢バスターミナルに全員集合、今回は昨年より減って8名となり室堂に向け出発した。

予定を変更して雷鳥平にキャンプを張り、明日剣岳をピストンすることにする。時間があるので22日は奥大日岳(2606㍎)へ登り、足慣らしトレイニングとする。聞けばほとんどの人が登っていない



快晴の剣岳山頂

いとのこと、咲きほこる高山植物をめ度ながら約2時間で奥大日岳へ登頂する。ここの頂上は東西に非常に長い尾根状の地形になっており、頂上の三角点はその西端に位置していた。

翌23日は6時に出発し、剣岳(2998㍎)頂上へは10時50分に到着した。カニの横ばいの渋滞によるロスタイムがなければ4時間以内で登頂も可能だと思われた。山頂で昼食をとり、あきるほど景色を楽しみ下山。天候はほぼ快晴、稜線を吹き抜ける風は冷たく秋を感じさせた。雷鳥平のベースキャンプには15時20分に帰着。夕食は

定番のカレーライスにビール、ウイスキーだ。

この雷鳥平はまるで巨大なコロシアムのような感じだ。昨夜に引き続き6万年ぶりに大接近の赤い火星を観察する。ネアンデルタール人も見たと思われる同じ大きさの火星を二十一世紀を生きる我々が見るということは、時空を超えて感慨深いものがある。空気が澄んでいるからまるで星が降るようによく見える。

翌24日朝、キャンプを撤収し室堂から扇沢へ、忘れられない山行が終了した。

(渡辺 登司美)

ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここから選んでいます。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 **アトラストレック**
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度をお願いします)



イラスト・宇都木慎一

様変わりする バルトロ街道

南井 英弘

7月18日から28日間、パキスタンでバルトロ氷河、ゴンドコロ峠越えのトレッキングを満喫してきました。過去の経験や情報と大きく様変わりしているところがあったのでご参考までに記します。

今までバルトロ街道はK2、ブロードピーク、ガッシャブルムなど巨峰に挑む遠征隊と何百人に及ぶポーターたちの入、下山道として混雑していた。ところが今年は遠征隊の多くがゴンドコロ峠経由で入、下山しているため、バルトロ街道で1日に出会うのは数人のトレッカーとそのポーターたちの

みで、静かな雰囲気だった。道中のゴミもほとんど無く、いつもあったテントサイト付近の人糞の山も見かけなかった。

パユーの対岸には軍の補給基地があり、100頭近い軍馬がウルドカスとコンコルディア駐屯所への燃料補給に従事していた。この軍馬は交渉次第でアスコレからウルドカス間のチャーターが可能だった。我々はパユーから2頭をチャーターした。隊員を背中に乗せたまま、リリゴ、ホブツエをとばして8時間でウルドカスに到着、ちようどトレッカーにとつて2日分を1日で行っている。また、下山時には1頭を借用し、ゴレ付近からアスコレまで4日間をかけて歩いている。

ジョラとパユーはパキスタンの



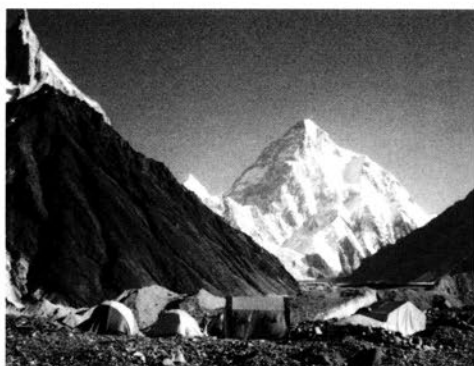
パユーキャンプ場に並ぶトイレ、シャワー、洗面台

篤志家によつてテントサイトが整備された。太陽光発電設備が設置され、ジョラではテントサイトやトイレ棟のある広場に夕方から23時まで10灯の明るい電灯が点いていた。清水もサージタンクに引かれ、5台の洗面台や洗濯場に終日給水している。トイレは「ツーリスト用」と「ポーター用」の立札が立てられた洋式とパキスタン式の一人用の便所棟が間隔を空けてジョラでは10棟、パユーでは10数棟ある。全て手汲みだが、水洗式で悪臭もなく立派な浄化槽もあった。シャワー棟も2棟あり、中には大きいバケツが常備されており、男女とも気兼ねなく汗を流すことができる。常に係員が清掃巡回し、清潔な状態を保っている。

またジョラでは広大なテントサイト一面に水パイプを敷き、柳など多くの苗木を植林していた。パユーでは以前からの植林で大きく育ったポプラや柳の木陰にテントを張ることができた。

入山者には目につきにくいのが、コンコルディアの氷河上にはかなり大きい軍の駐屯所ができたので、テントサイトが上方に移転した。その結果、ゴドウィン・オースティン氷河の真上にK2が見え、G4もより近く、チョゴリザの頂稜部も眺められる最良の位置になっている。

ゴンドコロ峠越えのルートは3年前にフーシェ谷の有志たちで結成された登山局公認の「レスキュー隊」によつて、バルトロ側、フーシェ側ともに数百名の固定ロープが取り付けられ、レスキュー隊員が引率することを条件に、通過者に有料で開放されている。ちなみに我々3人で25000ルピー(約5000円、ガイド、ハイポーター、ポーター6人に対する請求はなかった)を支払った。ヴァイン氷河上のムニール・キャンプを夜の1時半に出発した時からレスキュー隊員2人が同行した。激



K2を望む静かなキャンプ場

しい吹雪の中を、カンテラをつけてラッセルし、危険なクレバス地帯の通過時にも、ロープで我々を確保し、先に立って誘導してくれた。また、峠からの下降では逆層の岩の上に数十^キ積もった雪の中から凍りついたロープを取り出し、固定ロープの終わるところまで彼らの責任感溢れる行動には敬服した。

イスラマバードの登山局で、政府の担当部長から、このレスキュー隊について評価を求められた。堅実に活動している旨伝えたと、ろ、ロープの傷み具合まで照会があった。事故を起こす前にロープの取り替えまで指示していると話していた。

ゴンドロコ峠越えは海外でもトレッキングルートとしてPRされて、早朝太陽光が斜面に当たり、凍りついた浮き石が落ちだす前に通過することが常識になっている。数年前に較べて上部の人が引き起こす落石を避けるために直登降気味のルートから、かなりトラバース気味に付け替えられたが、決して安全とはいえない。

通過者はせめてユマールを使用しての登高と懸垂下降ができるだけの技術は身につけておいてほしいものだ。イタリアG2隊のポーター2人は凍てついた固定ロープのところで動きがとれなくなり、我々のハイポーターが首筋を捕まえて滑落を防いだものの、背負っていた荷物は2つとも谷底に消えていった。このルートは決して安全とは言えない上に、一気に7000〜8000^フを登って、標高5500^フの峠を越すために高度障害発生の危険性が高い。地元では政府から予算を獲得して、フーシェ谷の西にあるタレ谷経由で4000^フの峠を越えてバルトロ氷河に入るルートを開発中であるとの朗報もある。

バルトロ街道はますます快適で

身近な存在になることでしよう。

第7回ミセス・ウェストン祭

金子 誠吾

8月2、3日、1904（明治37）年、外国人女性として初めて戸隠山から高妻山に登ったエミリー・ウェストン（会員番号728）の功績をたたえる第7回ミセス・ウェストン祭が、戸隠高原にあるミセス・ウェストン記念碑前で開催された。戸隠村主催の碑前祭

には、本部より小倉茂暉元副会長の緊急入院により、藤本慶光常務理事、田畑真一会員、信濃支部会員7名を含む約100名近い参加者が集まった。

深緑の戸隠高原は快晴に恵まれ、式典は11時30分から始まり、英日両国の国歌吹奏、両国国旗と戸隠村旗を掲揚、来賓により記念碑に献花、ミセス・ウェストンを偲び白石みさよさん作詞の「遥かなりミセス・ウェストン」をガールスカウトが献歌した。

主催者の横川欣一村長は「来年はミセス・ウェストンが高妻山に

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ**

<http://www.fellow-travel.co.jp/>

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F

Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300

e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp

〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F

Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986

e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催：株式会社 **フェロートラベル** ボンド保証会員

国土交通大臣登録旅行業664号 協賛：ウェンゲン観光局・ツェルマツ観光局 後援：スイス政府観光局





ガールスカウトセンターで

登頂して100年を迎えるが、さらに日英の友好の輪を広げたい」と挨拶され、続いて日本山岳会を代表して藤本常務理事が「日本山岳会は再来年に創立100周年を迎えるが、山岳会が誕生するにあたってはウェストン夫妻の力が大きかった」などと紹介された。

式典終了後、全員が戸隠ガールスカウトセンターに移り、ガールスカウト手作りの料理で野外昼食会が開催された。ガールスカウト日本連盟副会長が「今年は英国のバーミンガムからガールスカウトがキャンプに参加しており、ミセス・ウェストン祭にも参加し、日英友好のため交流を深めておりま

すのでよろしく」と歓迎の挨拶をされ、英国ガールスカウトによる「英国ダンス」を鑑賞しながらおいしい料理に全員が大満足。

この後、センター講堂での記念講演は、稲本正氏が「世界の森を歩いた日本人として」と題し、世界の森と自然環境など人と森への想いを話された。

田畑会員と地元会員による懇親会は戸隠小舎へ移動し開催され、早乙女会員の乾杯と佐々木会員の歓迎の挨拶と続いた。田畑会員よりウェストンの研究活動を長年続けておられるお話や、豊田村から参加された高野良之会員が、文部省尋常小学校校歌「故郷」などの名唱歌を作詞し世に出された高野辰之の子孫（高野家第11代）であることが初めて紹介される。久しぶりに参加された下澤会員の自己紹介と近況報告など山麓清談が続き全員満足しながら散会となった。3日は快晴のなか記念登山が行われ、一般参加者は地元ガイドの先導により「高妻山」「飯綱山」「植物園周辺散策」の3コースに分かれ、ウェストン夫妻の高妻山に想いを馳せながら戸隠高原の自然を満喫した。

10年ぶり 学生だけのヒマラヤ合宿

大場 浩正

10年ぶりのヒマラヤ合宿に、先日学生たちが旅立った。目指すは、トレッキングピークであるイムジャツェ（6189m）と、初登頂50周年に賑わうエヴェレストBCである。関東のOBは前日の壮行会で、関西のOBは出発当日の関西空港で、すっかり頼もしくなっていた彼らを、感慨深げに見送った。

私が監督を務める立教大学山岳部のメンバーは、4年生1人、2年生2人、1年生3人で、エヴェレストBCへは全員で行き、イムジャツェは全員でBC建設、登頂は4年生と2年生の3人で目指す。シェルパは同行するが、できるだけ自分たちで登ろうということが、彼らの目標である。

当部も多くの他大学同様、数年前から一昨年までは、冬の北アでの合宿を組むことができなかった。部員の減少と、活動の停滞のためである。この間、何とか女性部員が在籍し活動してくれたおかげで、辛うじて山岳部の名前を大学内に

留めることができていたといった状態だった。

しかし、一昨年頃から若手OBが、山や街で現役と接する機会を多く持つようになり、また勧誘の奏効が部員も増え、徐々に以前の活動が復活してきた。5月の穂高で稜線に立つことを含む雪上訓練、三ツ峠の岩登り、6月の谷川岳での雪上訓練と登攀、剣真砂沢定着から穂高縦走に至る20日間の夏合宿、北岳バットレスの登攀や沢登り、冬山合宿の偵察山行、12月初旬の富士山での雪上訓練と頂上ピーク、そして北アの稜線を目指した冬山・春山合宿、さらに個人山行で八ツの水瀑登攀や、文登研での技術習得など。

このような流れの中で、彼らから自然に、過去は2、3年に1度行っていた「学生だけのヒマラヤ合宿をやりたい」との声が沸いてきた。当然異を唱えるOBはいない。あとは実現あるのみである。OBたちから、ステップとしての国内合宿、代理店、緊急連絡体制、資金についてなどなど、種々雑多なアドバイスが飛ぶ中、彼らはOBや大学の協力を得ながら、計画を立て、父母会を開いて説明し、

国内合宿をこなした。そして、前日の出発前礼拝で、チャプレンからあらためて謙虚さについて教えられて、旅立った。

明治大学隊による全8000峰の登頂や、東京農大隊によるエヴェレスト、ローツェの登頂など今日でも華々しい活躍を続けている山岳部もある中で、立教健児の活動は決して目立つものではない。しかし、10年ぶりの現役によるヒマラヤ合宿の実現に、同様にヒマラヤを目指してきたOBたちは、密かにあるいは大げさに、喜びを噛み締めている。

さらなる夢は少し先のことで、今は一回り成長した彼らの帰国と報告が待ち遠しい。

山小屋でのトイレ休憩

五十嶋 一晃

北アルプスの薬師沢小屋は、7時半から9時の間に通過する登山者が多く、小屋でトイレを利用する人が少なくない。太郎平小屋・薬師峠のキャンプ場と雲ノ平山荘・雲ノ平キャンプ場から、それぞれ早朝に出発すると、薬師沢小

屋あたりがトイレの時間帯に入るためだ。そのうえトイレ掃除とぶつかる時間帯でもある。通過者のトイレ利用はひと夏に1000人を超えるが、私はこの現象を「トイレ休憩小屋」と名づけた。小屋としては、それだけ宿泊者に乗せした設備を整えなければならぬ。

山におけるトイレ問題は、最近セミナーなどで取り上げられているが、私自身この問題は実際に体験してみても、私なりに納得できる見解を持ちたいと常々考えていた。そこで今夏、薬師沢小屋でトイレ問題に取り組んだ。臭気除去剤の効果を試すための実験も行った。その結果は別にゆずるとして、ここで特にとりあげたいのは使用のマナーである。薬師沢小屋のトイレは室内にあり、小屋の正面玄関には「トイレは自由にお使いください」と書いた貼紙があつて、誰でも何時でも自由に使用できる。トイレの掃除中に、マナーを心得た人に接すると、清掃を喜んでやりたい、登山者に少しでも役立ちたい、という気持になる。女性登山者で使用前のことわりの言葉と、使用後のお礼と感謝の言葉、

そして「これですっきりしました。また、楽しく歩くことができます」という素直な気持を表し、手洗いに置かれていた募金箱に献金を行って、元氣よく次の行程へ出発する人がいた。このようなタイプは圧倒的に女性が多い。

ツアーなどの団体では、添乗員があらかじめ小屋の人と話し合い「この小屋でトイレを済ませてください」とツアーのメンバーにすすめる。トイレ休憩が済んだところで皆さんから感謝の言葉があり「ツアーで使用したので、団体として募金します」といって千円札を

募金箱に入れていた。

反面、清掃中に何の断りもなく使用し、使った後も押し黙って小屋を出ていく人がいる。なかには男性で、清掃が終わっていないトイレを使用していただくよう案内すると「あんたのような者が指示するのか」とつぶやきながら不機嫌な表情を出す人もいる。このよう人はバテているせいなのか、心がすさんでいると解釈し「ご協力ください」といって事を終えるが、登山者もさまざまで、皆が気持ちよくトイレを利用するマナーが肝要だ。

「山の本」新刊発売中!!

関西の沢登り(1) 台 高 の 沢

樋上嘉秀 著 四六判 230頁 本体1,900円

台高山系の谷は水量も豊富、数十米の大滝をいくつも架けて豪快。32谷を厳選して詳細地図付きで紹介。

鈴鹿の山を歩く

草川啓三 著 四六判 330頁 本体2,500円

全山約85のプロフィールとガイド。珠玉の尾根歩きコース20を紹介。カラーフォトエッセイなど、盛沢山な内容。

●好評発売中

全世界紀行—民族と歴史、そして冒険

南里章二 著 (9364) A5判 480頁 本体2,700円

シルクロード、ヒマラヤの踏査。コンゴ、アマゾン川下り。サハラ砂漠縦横断など、世界全独立国192カ国を旅して。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・雁部貞夫 共著

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

会員歌、会員章の 流れと希望と

早乙女 緩次

先ごろの『山』に坂倉登喜子さんの寄稿した「日本山岳会100周年への夢」の中に、「日本山岳会の歌をつくっていただき、ウェストン祭で歌いたいというのがあります」という素朴な希望が載っていた。

それで思い出したのが長野県スキー連盟で、会歌こそはないが、なぜか応援歌があり諸々の会合の終わりに必ず全員で肩を組み合い、大合唱する習わしがある。それは競技団体だからなのだろうと思っている。我々の県には古くから「信濃の国」というのがあって、諸々の県の行事の前には必ず歌われるほほえましい光景であると思っている。

さて我々の会でも、前会長の大塚博美さんが就任年の晩餐会の席上で「JAC山」の歌または応援歌など機関誌『山』で募集したい」と挨拶を締めくくっている。会場は拍手喝采だったというのに、その後沙汰止みで未だ会歌のないの

を誠に残念に思っている。年配者等は偏に若いころテント場の脇でいろいろと喉を鳴らした思い出が蘇るからであろう。とは、歌こそは国に準えれば国歌であり、会員章こそは国旗に当たるからだろう。さてこの会員章は歴史が長く、すでに明治42年には制定され、『山岳』4年2号に発表され、敗戦直後に新章へと変わり、昭和43年発刊の『山岳』の表紙に現れ、49年までの数冊の表紙を賑わせた。かたや旧会員章は略称となつて今日に及んでいる。

100周年を迎えるにあたり一考を要していただきたい「山岳会歌」の制定誕生である。

アルピニスト

山崎直方とピッケル(下)

長田 義則

■三枝と中村の模作ピッケル

三枝、中村と加賀正太郎(151番)の3人は、東京高商(後の一橋)の同期で、三枝が2人を会員と知ったのは山岳会第一大会での顔合せだった。明治43年のこの3人の活躍は、日本の登山史に記

録を残した。

三枝と中村は7月の後立山連峰の初縦走で、三枝が赤石岳に使った借用ピッケルをモデルに模作したピッケルを携帯した。中村の知る鍛冶屋と、柄は棒屋に頼み、国産製第1号のピッケルを作った。*

同行の辻本満丸(20番・工学士)の手元は、富士金剛杖に大町で急拵えの鷹口だった。辻本は2人のアルペンストックを、急斜の雪渓を詰めるのに大いに有効と評価した(『山岳』6の1・同縦断記)。

一方の加賀は、8月に単身欧州アルプスに渡り、ユングフラウ(4158m)に登頂し、日本人初の記録を残した。同『山岳』に「欧州アルプス越え」の詳細を載せている。現地で求めたアイスピッケルなどの一式は、持ち帰って山岳会第4大会に出品して、来会者に最も注目された(『山岳』6の2)。

■アルペンストックはピッケル

山崎が留学先からもたらした氷河渡りの杖は、アルパインスティックといわれ、岡野と烏水はウェストンのピッケルをアルパインストックと教えられ、辻村は「アイスアックスはアルペンストック」と述いう昔風の名をもっていた」と述

べている(辻村太郎著作集1巻)。後立山縦走に使った三枝、中村の模作ピッケルはアルペンストックと呼ばれたが、加賀のアルプスの氷河に使ったアイスピッケルの名はそれに替わり広く知れ渡った。また加賀は、ピッケルとは別にストックリング付きステッキも持ち帰った(大町山岳博物館蔵)。

■三枝の借用ピッケル

好日山荘の西岡一雄(1211番)は『登山の小史と用具の変遷』(昭和33年)に、『山岳』2の1の表紙絵の「登山者の手にアルペンストック、背にピッケル」を見て、当時の登山者姿と違いすぎると驚いた。西岡の「背にピッケル」は、この頃アルペンストックと呼ばれ、手の釣形杖は、丸山晚霞(130番)が欧州アルプスから持ち帰ったアルプス金剛杖とも呼んだのだろうか(『山岳』8の2)。西岡、広瀬も三枝の借用ピッケルの貸主特定では不詳に終わった。

好日山荘にいた堀田弘司氏は、『山への挑戦―登山用具は語る―』(平成2年)に「三枝は山崎のピッケルを借用し、これをモデルに中村の模作ピッケルができた」と発表した。その原典の明示は得られ

● さんけん通信 ●

雨の朝の上高地

管理人 木村太郎・弥生

開山中の半年を上高地で暮らし始めたことで知ったこと、感じたことは数知れません。そんな中で最近、ささやかながら、でも「人間も動物なんだあ」と改めて思わせる発見がありました。

雨の日の朝はとにかく眠い。なかなか体が思うように動きだしてくれません。雨の朝は鳥などの動物たちも餌を捕るのをお休みしてノンビリ過ごすのか、いつもはにぎやか過ぎるくらいに聞こえる鳥の声も聞こえず、とても静かです。

さらさらと聞こえる雨音が耳に心地いいのと同時に、目覚まし代わりになりそうなくらいの鳥の声が聞こえないことが眠い理由のひとつかと思っていたのですが、「今日は雨だから餌を捕るのはお休み」と体の中のスイッチがオフになってしまうような感覚を体感し

てしまったのです。雨音が心地よく聞こえる薄暗い管理人室の中で、体の機能装置がオフモードになる音を今年はっきり聞いたような気がしました。

それは、東京の鉄筋の家では感じられない動物的な感覚でした。ただ、ネボスけな私たちが「これが動物的な本能のひとつだ」と断言するのは少々パワー不足な気がします……。

短すぎた夏を見送り、今年も上高地に秋がやってきました。これからは日を追うごとに冬に近づいている、といった感じになってきます。動物的には長い冬に向け体内に栄養（脂肪）を蓄え始める季節。これだけは動物とは一線を引きたい行動であります。



イラスト・宇都木慎一

なかったが、熟慮の末の結論であろう。筆者の推測の山崎直方のピッケル↓山岳会展示↓赤石岳に三枝借用↓模作ピッケル↓後立山に三枝、中村使用、の考えは、三枝が会の行事で山崎と交わり、容易に借用ができたと思われる。が、ここに三枝本人の記憶談がある。

「ピッケルを作る話ができて、中村君が近くの鍛冶屋に製作を依頼され、見本には私が独逸帰りの東大の先生に拝借したものをういたように記憶します。これも確かなことは覚えておりません」（『山岳』63年・中村清太郎の追悼記）。調査推考の及ばざる垣根でもある。

三枝のピッケル使用の前に、山崎を師と仰いだ辻村太郎の記録がある。明治39年夏、父延太郎（漆工芸家・東京美術学校教授）が、ジュネーブからのみやげにアルペンストックを持ち帰り辻村に与えた。

翌明治40年7月、17歳の辻村は

初めてそのリュックサックを背負い、華奢なシモンのアルペンストックを携え、常念山脈を縦走している。（辻村太郎著作集1、6巻。小野有五、『山岳』79年、辻村太郎追悼）ピッケル借用の嚆矢として山崎に追隨する記録である。

草創期の山岳会を陰に陽に援助

した帝大理学部教授兼東京文理科大学教授理学博士・山崎直方は昭和4年7月26日逝去した（東京地学協会、地学雑誌41年486号）。『山崎直方論文集』前後編が編集され、それに辻村は「欧州では留学当時東部アルペンを跋涉され、帰朝後は白馬岳立山等を探検し、それより遙かに遅れて飛騨山脈中央部の縦走が行われている。山崎先生をアルピニストのひとりとして見ることも不当ではない」と記している。（文中敬称省略）

*『山』511号に広瀬潔氏（931番）の玉稿、「ピッケルの渡来と製作」として掲載済。この時の写真を提供された杉本誠氏（10027番）から、三枝の持つ「ある学者のスイスみやげ」のピッケルは、その後の精査から模作ピッケルであるとの電話を筆者はいちだいた。

山岳地帯のインカ遺跡の探査と発見—Thermal imaging techniquesを使用

18. ヒリシャンカ再挑戦／Alun Powell／ペルー・
コルデイエラ・ワイワッシュ (475)
ヒリシャンカ6094m南東壁の初登攀

19. テプイ 2003／John Arran／ベネズエラ・ロ
ライマ (475)
Gran Sabana地方の未踏峰の登攀

20. Prins Chris. Sund／Ben Heason／南グリー
ンランド (400)
Prins Christian Sund岩峰・岩壁初登攀

21. Eagle Ski Club／Dr. Steve Wright／キルギ
スタン (400)
天山山脈Al Shiirakのスキー横断と探検

22. クンブ2003／Nick Bullock／ネパール
(475)
MahalangurのKusum Kanguru 6367m 南西
壁、Lobuje北壁、Kwange北壁初登攀

23. 真夜中の太陽 2003／Martin Bohl／東グリー
ンランド (400)
2380m～2680m 3峰の初登頂と氷河探査

24. スコットランド2003／Malcolm Thornburn
／南西グリーンランド (225)
三つの未踏地域の探査と初登頂

25. Kitchana 2003／Stuart McAleese／USA
アラスカ (700)
Middle Triple Peak 2693mとSuper Dupa
Couloir on Citadel 2597m 東壁の初登攀

26. Qomo Lhari 2003／Mt. Julie-Ann Clyma
／中国・チベット (750+400*)
Qomo Lhari 7314m北西稜の初登攀

27. Reo Purgyil 2003／Mt. Julie-Ann Clyma
／インドKinnaur (750)
Reo Purgyil 6816m北壁の初登攀

28. APEX 2 (sci)／Dr. Roger Thompson／ボ
リビア西部 (225)
チャカルタヤ研究所5200mにおける急性高山
病の原因・治療の研究

29. Mt. Vancouver 2003／Dr. Paul Knott／カ

ナダ・USA (550)
ユーコンMt. Vancouver 4812m東稜の初登攀

30. 英国Foraker／Rich Cross／USAアラスカ
(550)
Foraker 5304m南東壁に新ルート

31. 英国Mt. Grosvenor／Mick Fowler／中国・
四川省 (700)
大雪山山系Mt. Grosvenor 6376m初登頂
(不成功)

32. スコットランド Lemon Mountains／
Graham Stein／グリーンランド (200)
Lucy & Courtauld 氷河間の山域の初登頂と探
査

33. アラスカー2峰／Mt. Pat Deavoll／USAアラ
スカ (350)
3511m Peakの北壁とMt. Hunter 4441mの西
壁—西稜の初登攀

34. 英国 Da Kangri／John Town／中国・チベッ
ト (475)
念青唐古拉山西部Da Kangri 6247m初登頂

35. Hong Meigui雲南／Mt. Hilary Greaves／中
国・雲南省 (475)
Zhongdian 山塊 4000～4500mの洞穴探検

36. Huangjiang／Ged Campion／中国・貴州省
(475)
Huangjiang & Luocheng県のDagou川流域の
洞穴探検

上記助成金合計	20,125
アルパイン・クラブへの助成	2,500
助成金総合計	22,625

* Alison Chadwick Memorial Grant for 2003

●地域別遠征数

グリーンランド—9 中国・チベット他—7 ペルー
—4 USA—4 インド—2 キルギスタン—2 ネ
パール—2 南極、アルゼンチン、ボリビア、カナ
ダ、メキシコ、チリ、パキスタン、ベネズエラ、ベ
トナム—各1 (洞穴—caving—探検5隊を含む)

注記：エヴェレスト50周年記念事業を華やかに実行
する一方で、パイオニア的な遠征をサポートする英
国の伝統が生きている。登山や探検にたいするカル
チャーの違いだ。

英国エヴェレスト財団—2003年助成金対象の遠征計画

海外委員会 中村 保

〈太字〉 隊名/隊長/遠征場所/助成金 (英ポンド) 〈細字〉 目的

1. Aquilera 2003/Dr. D. Hillebrandt/チリ
西パタゴニア (750)
Cerro Aquilela ca 2500m 探査と初登頂
2. 北東トコシトナ/Malcolm Bass/USAアラ
スカ (675)
Kahiltana Queen 3773m 南壁と3511m峰北
壁の初登攀
3. マエストリ・エッガー/Alan Mullin/アルゼ
ンチン (600)
Cerro Torre 3128m Maestri-Egger route
(Fitz Roy山群) のアルパイン・スタイル登攀
4. Kyrgtz-Kuila 2003/Dr. Robin Gibson/キ
ルギスタン (675)
Kuila谷の南、Kuila Too山脈の探査初登頂
5. 南ジョージア島/Dr. Alun Hubbard/南極 (750)
未踏の'Brothers'を含むca 2100峰(南ジョー
ジア)の探検と初登頂
6. Craven Pothole Club/Kevin Cannon/中
国・甘粛省 (750)
未踏の洞穴探検とカルスト地形・地質調査
7. ベトナム2003/Howard Limbert/ベトナ
ム各地 (750)
各地での洞穴の偵察と探検の継続
8. In the Abode of Clouds/Simon Brooks/
- インドMeghalaya (750)
東北インドMeghalayaの洞穴とカルスト探検
の継続
9. SMC グリーンランド/Stephen Reid/東グ
リーンランド (225)
Dansketinde 2390mの南稜の初登攀
10. NZ ヒリシャンカ/Mike Brown/ペルー/コ
ルディエラ/ワイワッシュ (475)
Jirishanca Chico 5270m南西壁とJirishanca
6126m 中央南東壁の初登攀
11. アンナプルナⅢ峰南西稜/Kenton Cool/ネ
パール アンナプルナ山群 (750)
アンナプルナⅢ峰7550m南西稜をアルパイン
スタイルにより初完登
12. Walesグリーンランド/Mt. Sue Savege/
東グリーンランド (225)
Tupilak 2264mおよびRodenbjrg 2140mの
北面・南面の新ルート開拓と撮影
13. チベット処女峰/Adam Thomas/中国・チベ
ット (800)
念青唐古拉東部の探査と初登頂—尼屋曲の南ネ
ナン6870m、カジャチョ 6447m
14. Knud Rasmussen/Bob Dawson/東グリ
ーンランド (225)
未踏の山の初登頂
15. 南Kangerdlugssuaq/Phil Barlett/東グリ
ーンランド (700)
氷河の探検とアルパイン・スタイル初登頂
16. 英豪Torssukatak Spires/Jon Roberts/
南グリーンランド (200)
Aguderlussakasit等の東壁に長いフリーのロ
ッククライミング・ルートを開拓
17. Thomson - Zieglerペルーアンデス調査/
Hugh Thomson/ペルー・コルディエラ・ピ
ルカバンバ (475)

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申してください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



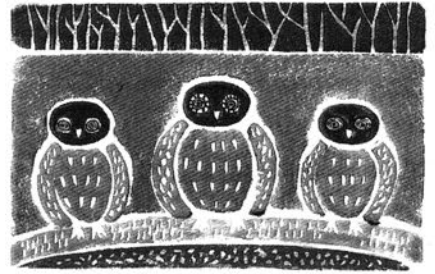
古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野漢石

『登山史の森へ』

遠藤甲太・著

「登山史の落としもの」と「山と人間」の2部構成になっており、分厚いハードカバーに奥深い表題となっている。しかしページを開くと登山を歩くような、何に出会わなければならない雑多な記事を集めていて、気楽に読める内容である。

前者では「カモシカ山行の由来」に始まり、「へんな山の道具たち」など、どのカテゴリーにも収まりきれないものばかりを集めたという観がある。「愛すべき山の犬たち」として南極越冬隊の残した樺太犬の始末を厳しく示唆しているなど圧巻である。また、明治

後期初期西欧式登山のアルピニズム幕開け期の登山用具の紹介や、沢と谷とはどう違うかなど、歴史的にも知って欲しいことが約200ページに掲載されている。

後者は東西有名登山家のこぼれ話で「クライマーとしてのW・ウエストン」、「アルピニスト松濤明再考」、「R・メスナーの孤独」など10編が各20〜30ページに収められている。特にウエストンについては、ロッククライマーとしての氏の活躍など視点を変えて知ることができる。(林 栄二)

2002年6月 平凡社刊 3
98頁 2800円

『MYSTERY, BEAUTY, AND DANGER』

Robert H. Bates・著

「神秘、美、そして危険」という題をもつこの英語の本の著者はロバート・ベイツ。アメリカを代表する登山家のひとりで、1930年代から50年代にかけてアラスカとヒマラヤで先駆的な登山を行った人として名高い。『K2』などの著書で登攀報告の分野での名文家としても高い評価を受けてきた。しかも、無類の読書家でもある。

会報『山』合本・製本のお知らせ

事務局

会報651〜700号の合本をご希望の方は、11月末日までに現本を事務局までお送りください。

1. 製本業者は前回と同様です。
・全面同色（ブルーグレー）
・コーナー（角）の補強なし
・背表紙にタイトルと会員番号を印字
・索引は巻頭綴り
2. 『山』のバックナンバーは各号150円です。ただしすでに欠号もありますので、その場合はコピーで代用になります。
3. 製本費用は、梱包・返送費用を含めて5000円です。来室受け取りの場合は800円引きですので、その旨お書き添えください。代金は書籍返送時（2004年1月）に同封の振替用紙で後日ご送金ください。

「1946年以前に英語で刊行された山岳と登山の文献」という副題のある本書は、十六世紀にアルプスを旅したイギリス人の報告にはじまり、二十世紀なかばのシプトンやジャネット・スミスに至る英語の文献を展望する。詩や小説から旅行記や登頂記に至るまでの文献の歴史は、イギリス人によって開拓されたアルプスからヒマラヤに至る道にアメリカ人が枝道をつける歴史でもある。

映画やテレビなどの映像の生まれる以前、山岳の魅力の発見と登山の冒険の喜びに、広い意味での文学がどれほど大きな貢献をしてきたことか。著者はアメリカ山岳

会の図書館で山岳と文学、登山と文献の幸福な関係を噛みしめながら本書を綴った。その思いが伝わってくるような書物である。1924年にマロリーとアーヴィンが行方不明になる3日前に撮影されたエヴェレスト頂上部の写真が3葉掲載されている。(宮下 啓三)
2002年 ピーターランデル書店（アメリカ・ポーツマス）
発行 229頁

『自然と冒険の旅』

日外アソシエーツ・編

データベース会社の日外アソシエーツが編集発行している読書案

内シリーズのうちの紀行編。自然紀行一般、山岳・高原、海・島、河川・溪谷、湖沼・湿原、草原・砂漠、植物、動物、探検・冒険の9分野の大項目に分かれ、その下に中・小項目がある。

分野別のページ数では「山岳・高原」が圧倒的に多い。その主な中項目は地域別、小項目は主要山名、収録図書の配列は書名の五十音順、巻末に簡単な事項索引がある。書誌の専門会社が考え抜いた末のシステムだとは思いますが、山書好きは工夫が足りないと思う文句をつけそう。

そもそも収録図書は2001年までの最近20年間に日本国内で刊行されたものが中心で、古典はその間に復刻、重版、新訂されたものに限られる。重要文献はその前のもも収録したと編者はいうが、選び方がちぐはぐで思いつきばつたりの観がある。とはいえ全分野の収録図書は8396点、ほかにこの種の総合的な目録がないこともあり、山と探検の本の現状を知るには恰好の手引きになるだろう。

(平井 吉夫)

2002年11月 日外アソシエ
ツ刊 438頁 6800円

図書受入報告 (2003年7~8月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
大悟法雄作	いち・びり登山記	229pp/19cm	文芸社	2003	著者寄贈
姉崎一馬	姉崎一馬の新自然教室:朝日連峰山麓	261pp/19cm	山と溪谷社	2003	出版社寄贈
火山防災用語研究会(編)	火山に強くなる本:見る見るわかる噴火と災害	199pp/21cm	山と溪谷社	2003	出版社寄贈
三宅修	現代日本名山圖會	377pp/22cm	実業之日本社	2003	出版社寄贈
菊地敏之(編)	ベーシック・フリークライミング	134pp/26cm	東京新聞出版局	2003	出版社寄贈
松田敏男	光る山山:松田敏男 山の版画集	/22x31cm	東京新聞出版局	2003	出版社寄贈
沼田英子	小島島水 西洋版画コレクション(横浜美術館叢書 No.8)	169pp/22cm	有隣堂	2003	著者寄贈
横浜山岳会(編)	未知を求めて:横浜山岳会創立70周年記念誌	259pp/26cm	横浜山岳会	2003	発行者寄贈
二階堂匡一朗(編著)	吾妻山回想譜:先人に捧ぐる鎮魂歌	581pp/27cm	二階堂匡一朗(私家版)	2003	著者寄贈
静岡大学山岳会(編)	紫岳:静岡大学山岳部創立70周年記念誌	447pp/30cm	静岡大学	2003	発行者寄贈
渡邊玉枝	63歳のエヴェレスト	213pp/19cm	白水社	2003	出版社寄贈
小泉武栄	山の自然教室(岩波ジュニア新書 No.443)	204pp/18cm	岩波書店	2003	出版社寄贈
日本ヒマラヤ協会(監修)	ヒマラヤへの挑戦 第4巻	295pp/27cm	アテネ書房	2003	出版社寄贈
佐伯邦夫	渾身の山:我が領岳北方稜線	315pp/20cm	白山書房	2003	出版社寄贈
岸智礼	奥利根・谷川連峰の沢	148pp/21cm	白山書房	2003	出版社寄贈
東京農業大学山岳部(編著)	エベレスト・環境登山への挑戦	36pp/21cm	東京農業大学山岳部	2003	発行者寄贈
Richard Sale	Climbing the World's 14 Highest Mountains	228pp/29cm	Mountaineers	2000	購入
Ram Kumar Panday	Japanese Expedition Experiences in the Nepal Himalaya	452pp/23cm	Nepal-Nippon Research Center	2003	著者寄贈
M. F. Buchroithner (ed.)	High-Mountain Remote Sensing Cartography	144pp/30cm	Dresden Univ.	1996	W.Heichel氏寄贈
C. Gardien & R.Paragot	Himalaya: L'Epopée des Expéditions Françaises de L'Annapurna a Nos Jours	143pp/30cm	Libris	2000	W.Heichel氏寄贈
大垣山岳協会	未踏の岐阜県境800キロを歩く	323pp/22cm	岐阜新聞社	2003	発行者寄贈
谷有二	山名の不思議(平凡社ライブラリー No.475)	278pp/16cm	平凡社	2003	出版社寄贈
小川誠	北アルプス 3000mの風貌(小川誠写真集)	84pp/25cm	東京新聞出版局	2003	出版社寄贈
樋上嘉秀	大峰の沢(関西の沢登り No.2)	237pp/22cm	ナカニシヤ出版	2003	出版社寄贈
福井山岳会(編)	県境をゆく	346pp/19cm	福井山岳会	1980	宮本数男氏寄贈
Michael Ward	Everest: A Thousand Years of Exploration	350pp/25cm	Ernest Press	2003	購入
Brad Washburn	Mount McKinley's West Buttress The First Ascent	142pp/26cm	Top of the World Press	2003	中村保氏寄贈

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆金子民雄氏講演会

―西域探検とグレートゲーム

海外・事業委員会

二十世紀の初め、中央アジアは発掘・発見が相次ぐ探検の華やかな時代。そんなロマンチックな香り漂う西域の現実、しかし同時に大國の演じる激しい外交戦、グレートゲームの舞台でもありました。今まで語られなかった中央アジアを舞台とした探検の表と裏。

日時 11月5日(水)

開演 18時45分(受付18時)

場所 学習院百周年記念会館第4

会議室(目白駅前)

講師 金子民雄氏

申込 10月31日までに氏名、住所

会員番号を明記しハガキか

メールで絹川祥夫宛(〒3

59-1141 所沢市小

手指町1-25-1・B814、

kinuyo@tbd.t-com.ne.jp) 締め切り厳守。

*申込者には会場案内と聴講券を送付します。

*会員以外の方も誘い合せのうえお出かけ下さい。

◆マラソン大会

期日 11月16日(日)

学生部

場所 皇居周辺 桜田門集合

時間 10時 団体戦スタート

13時 個人戦スタート

14時半 表彰式

18時 打ち上げ

*OBの応援、差入れ歓迎です。

◆冬富士山雪上訓練講習会

事業委員会

当会員若手一流プロガイドによる、一般会員の雪山初歩入門の富士山雪上訓練講習会を開催します。04年ヒマラヤ・カングリシヤール隊、05年マナスル隊参加希望者は必ず参加してください。雪山未経験者、シニア、女性会員歓迎。

日程 11月28日 現地5合目

佐藤小屋集合

29日 雪上訓練講習会

30日 佐藤小屋―富士山頂

往復、シニア・女性会員7

募集 20名先着順

費用 3万3千円(ガイド、宿泊費、保険含) 昼食各自用意

申込 10月27日までにFAXかハ

ガキ、メールで長久保浩司

宛(〒169-0051

新宿区西早稲田3-1-3

西尾ビル5階 FAX 03-5

273-4823)

climbing@bngreenbell.com

◆さんげん年末年始にオープン

山研運営委員会

今年も年末から年始にかけ、委員が山研に駐在して建物のメンテナンスを行います。この期間は山研をオープンしますので、会員は利用(宿泊)することができます。

期間 平成15年12月30日

平成16年1月3日

申込 11月末日までに住所、氏名、

電話、会員番号を坂本正智

宛(Tel・FAX 042-373-

3238)

◆韓国・雪岳山 氷瀑登攀講習会

事業委員会

*申込者に詳細を送ります。

韓国は今年で8000坪14座完

登者を3人を輩出しており、その

レベルアップは注目に値します。

新進気鋭クライマー講師を招き氷瀑登攀講習を開催。月刊誌「人と

山」社協力による韓国岳人と交流懇親会もかねます。シニア、未経験者、女性会員歓迎。

場所 韓国・最大氷瀑土旺城瀑布

期日 1月9日(金)〜12日(月)

行程 9日成田―仁川―速草―雪

岳洞

10日雪岳洞―終日飛仙台氷瀑講習

11日雪岳洞―土旺城瀑布―

速草―半日ソウル市場観光

12日ソウル―仁川―成田

費用 12万5千円

定員 先着20名

申込 12月10日までにFAXかハ

ガキ、Eメールで長久保浩

司宛(〒169-0051

新宿区西早稲田3-1-3 西

尾ビル5階 FAX 03-

5273-4823

climbing@bngreenbell.com

◆中央構造線露頭実地研修旅行

山の自然学研究会

期日 11月3(月)〜4日(火)

行程 3日 朝JR相模湖駅改札

口集合・マイカー出発―相

模湖駅―高遠―溝口露頭―

北川露頭―鹿塩温泉(泊)

4日 中央構造線博物館―

案康露頭―相模湖駅、解散

費用 実費2万円(資料配付、交通費、宿泊費)

定員 10名

同行 L・船橋明 SL・舟根章

説明員 白木幹司

保険 国内交通傷害保険に加入

申込 10月27日までに氏名、住所、電話、FAXを記入の上船橋明宛(FAX 0467-3213011)

***申込者に詳細をご通知します。**

◆**鳴虫山日帰り山行 つくも会**
 白く染まり始める奥日光連山をバックに晩秋の鳴虫山を訪れます。地方支部会員の方も一緒に楽しみませんか。

期日 11月8日(土)

集合 9時30分・東武日光駅

所要 約4時間

費用 500円

食糧 昼食および行動食

申込 11月5日までに往復ハガキに会員番号、氏名、連絡先、鳴虫山希望と記入し渡邊たみ子宛(〒177-0003 3 練馬区高野台5-2-14)

◆**七面山・八紘嶺登山 山遊会**
 秋色の甲斐の山を歩きましょう。

日時 11月8(土)・9日(日)

集合 8日9時40分・身延駅

(甲府8時51分発・特急ふじかわ4号・身延着9時39分)

コース 身延―羽衣橋―桂慎院
 (泊)―七面山―八紘嶺―梅ヶ島温泉―静岡

費用 約2万円

申込・問合 ハガキにて植木信久宛(〒195-0053 町田市能ヶ谷町1-15-1 54 TEL 042-734-1498)

◆**イベリア半島の旅 二火会**
 グレドス、ピレネー、カンタブリア、ピコス・デ・エウロパ等の山々をご夫妻で3か月間気ままに歩かれたお話をスライドを見ながらお聞きます。

日時 12月16日18時30分

会場 日本山岳会集会所

お話 中村純二・あや会員

費用 500円

問合 金井一子(Tel 03-3714-7388)

◆**会員異動**

物故
 小森正明(6191) 03・6・1
 滝 紘之(6603) 03・6・7
 浅倉嶺祐(12967) 03・7・23
 退会

ルーム日誌

船場俊己(8836) 北海道
 古橋昭雄(10166) 東海
 内田拓郎(12220) 宮崎

8月

1日 フォトビデオクラブ 01同
 期会 休山会

2日 三水会

4日 総務委員会 アルパインスキークラブ

5日 アルパインスケッチクラブ

6日 山岳編集委員会

7日 事業委員会

8日 会報編集委員会 事業委員会

18日 会報編集委員会 インターネット小委員会 00同期会
 アルパインスケッチクラブ

20日 総務委員会 山研運営委員会
 アルパインスキークラブ

21日 科学委員会

22日 臨時理事会

26日 自然保護委員会 山の自然学研究会 百周年記念事業委員会

28日 青年部 97同期会 山遊会
 8月来室者337人

◆編集後記◆

●創刊700号記念のカラー号、いかがだったでしょうか。お手紙やメールのほとんどで高い評価をいただき、年1回位やつたらどうかという意見もありましたが、1件だけクレームもありました。

●記年号を前に会報の合本を改めて読み、初代編集者の浦松佐美太郎氏が、原稿の投稿を呼びかけるとともに「投稿が長文すぎるのでできるだけ短く要点を」と書いてあります。いつの担当者も同じ苦労をしているのだなと思いました。

●巻頭の平山会長の言葉にあるように、いよいよ100周年に向けて具体的な活動が始まります。全会員参加のイベントにすべく、会報でも現状報告をしますので、協力よろしく願います。

(今村千秋)

日本山岳会会報 山 701号

2003年(平成15年)10月20日発行
 発行所 社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビュウハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 平山善吉
 編集人 今村千秋
 E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社